

# 水の空間の再評価 現代都市への活かし方・ミラノ



現在のミラノ



運河で洗濯する女性達

中世、近世と舟運で栄えてきた町が、わが国では近代、特に戦後、あまり評価されなくなってしまう。さびれてしまった町も多く、使われなくなり、研究者もそのことに疑問を抱かなくなった時代が続きました。

ところが、最近では、やっと時代が変わってきまして、水辺の空間を見直してみようという空気が、ここ十年ほどの間に生まれてきています。水辺というのは市民の生活にとって、たいへん魅力的な舞台となります。そこで、もっと個性をもたせて、楽しい空間を作り出し、アイデンティティのある素晴らしい町を造っていきたいという時代の要求が出てきた時に、水辺の空間というのは、たいへんに良い手がかかることになるわけです。ですから、世界中に水辺を再生する、活用するという動きが出、新しい価値観の時代を迎えますと、国内外の各地で水空間の再評価が行われ、それをうまく活用して町づくりに活かす例が出てきました。そのいい例がミラノです。

ミラノはヴェネツィアと同じ様に、

水の町でした。洗濯をしている女性達の写真が残っていますが（写真右上）、こうした姿は、まさにアジアの都市を思わせます。こういう光景がフィレンツェでもミラノでもあったわけです。町中いたる所に運河が巡らされ、船が行き交っていました。ミラノも東京や大阪と同様に、近代には、どんどんと運河を埋めてしまいました。しかし、幸い三系統の運河が残りました。その運河の見直しがこの三十年の間に進みました。市民、行政、専門家達ががんばり、今や運河が新たな装いで、時代に合った機能を果たしています。本来

ここは、荷が揚がり、港湾労働者も多数いた庶民地区です。それが、今やフアッシュヨナブルなアトリエやスタジオ付きの住宅、あるいは商業空間、そういうものが入り込んできまして、ミラノで一番人気のあるゾーンに蘇ったわけです。

この事例は大きなヒントになると思います。運河に、カフェ、ボートのレストラン。特に、週末になると、郊外から若者がこの界限にどんどん集まっ

てくる。その結果、この十年程の間に、都市がみるみると再生されていき、人気のスポットとなりました。

そうなると、周りの住宅が再評価されはじめたわけです。本来は、庶民が住んでいた何でもない住宅が、どんどん現代的にシヨアアップされて、アトリ工付きのアパートになったり、マンションになったり、職場になったり…。非常に人気があります。

つまり、歴史的な香りを現代的に活用するということがおしゃれになってきたわけです。そこで、歴史的な水辺空間が再評価される。すると、アンティークショップやマーケットができ、多様な店が集まり、それを求めて人々が集まってくる。水辺空間はイベントが演じられる空間としても最適です。こうして、人々が水辺を楽しむ。この価値をもつ一度身体で体験する。すると、都市の魅力は相乗的に高まって、人と情報がどんどんと集まる交流の場となっていく。

現在、各地で運河のみならず、様々な歴史のある水の空間が残っています。



運河沿いの青空ギャラリー



運河に浮かぶボートのレストラン



運河の横の魅力あるカフェ

これはぜひ参考にさせていただくべき一つのモデルだと思います。

現在の町を「水の町」という視点から評価するポイントとしては、いくつか挙げる事ができます。舟運の見直し、水辺の再生活用、美しい風景づくり、水辺の空間の価値を歴史的に掘り起こす、水辺が喚起するノスタルジア、楽しさ、想像力、空間と意味が個性的に折り重なり、多様な機能が集積し、人と文化の交流の拠点となる。こつとした水の町の再評価は、読者のみなさんがごく身近に接している町でも行ってみると、思わぬ顔が見えてくると思います。

再評価した結果、これを21世紀の都市づくりの中でどの様に活かしていったらよいのか。どの町も、本来、水の都市であった時代からのストックがあると思います。今ままであまり見向きもされず、気づかれなかった面かもしれません。特に、運河、周囲の蔵、歴史的な建物、そういう空間を活かして現代の魅力ある空間に再生していくということは、大いに可能性があると思います。皆さんも身近な所で是非とも舟運と結びつけた都市空間を読みとっていただき、現代に活かす知恵を発揮していただきたいと思います。



## 21世紀の港町・水の町

1. 水・自然との共生のモデル
2. 舟運の見直し  
実用 文化 遊び
3. 水辺の再生・活用  
ストックの活用  
多様な経済・文化活動  
活気の蘇り
4. 美しい風景づくり  
都市のアイデンティティ

## 港町・水の町の再評価

1. 歴史の重なる町  
記憶 物語 ノスタルジー 楽しさ 想像力
2. 個性的な風景  
ヒューマン・スケールの空間  
迷宮・路地・坂 解放感 眺望
3. 多様な都市の仕掛け  
船着場 灯台 波止場 町家・蔵 宗教施設
4. 経済と文化の拠点  
人・物・情報

## 岡本 哲志

岡本哲志都市建築研究所代表

1952年生まれ。法政大学工学部建築学科卒。都市の水辺空間に関する調査・研究に永年携わる。丸の内・日本橋・銀座などの調査・研究プロジェクトに関わり、都市形成の歴史から、近代都市再開発の問題や都市の「定着、流動」と都市の活力や創造力の関係性を検証している。

著書に、『水辺都市 江戸東京のウォーターフロント探検』（朝日新聞社、1989年）、『水の



## 陣内 秀信

法政大学教授

1947年 生まれ。東京大学大学院工学系研究科建築史専攻修了。工学博士。1973年イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学へ留学。ユネスコ・ローマセンター、東京大学助手を経て1982年より現職。専攻、ヴェネツィア都市形成史、イスラム都市空間論、江戸・東京都市空間論。サントリー学芸賞、建築史学会賞、地中海学会賞他を受賞。

著書は、『ヴェネツィア都市のコンテクストを読む』（鹿島出版会）『都市を読む・イタリア』（法政大学出版局）『江戸東京のみかた調べ方』（鹿島出版会）『水辺都市—江戸東京のウォーターフロント探検』（朝日新聞社）『ヴェネツィア—水上の迷宮都市』（講談社）『都市と人間』（岩波書店）『中国の水郷都市』（鹿島出版